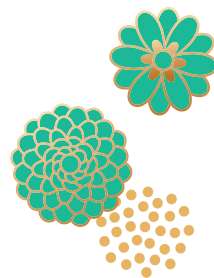




病院長 小池 和彦

新年のご挨拶



2026
HAPPY
NEW YEAR

新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

今年（令和8年、2026年）は「うま年」ですが、十干が「丙（ひのえ）」、十二支が「午（うま）」の年にあたるので、干支（えと）は「丙午（ひのえうま）」だそうです。馬は「成功」「繁栄」「スピード」「自由」のシンボルであり、丙午は特に力強く、物事が最高潮に達する「頂点」や「成熟」を表す年といった意味合いがあるとも言われています。他方、「丙午」には古くから迷信があり、昔は丙午の年に子どもを産むことを避けることが一部で行なわれていたそうです。私が子供の頃の昭和41（1966）年が前回の丙午にあたり、子供心に「そんな迷信が今どきまかり通る訳がない」と思ったものでしたが、実際に「1966年生まれの人口が統計学的に有意に少ない」という事象を知った時は愕然としました。2026年生まれの人の数はどうなるでしょうか。

さて、このところの我が国の医療をとりまく環境は厳しく、病院、特に急性期病院と呼ばれる病院の経営にはより厳しいものがあります。国立病院、公立病院、公的病院の7～8割が令和6年度は赤字であり、令和7年度は更に大きな赤字と言われています。その原因としては、診療報酬改定による収益の伸び悩み、物価高騰（医薬品、光熱費など）、そして人件費の増加が言われています。特に、診療報酬が物価上昇に追いついていないことや、医師の働き方改革も含めた人件費の負担増が大きな要因となっています。国は病院への支援を明確に打ち出していますので、それに期待するところですが、個々の病院の痛みを伴う改革も必須です。

そんな訳で、新年を迎えるのに明るい話題が乏しいなと思っていたところ、年末に心温まる出来事がありました。関東中央病院糖尿病友の会である「櫛（けやき）会」が50周年を迎え、記念式典が開催されたのです。櫛会は昭和50（1975）年12月に会員66名で発足され現在でも100名弱の会員がおられます。これは、よほどの信念がないと持続できないものであり、歴代の会長さん、部長医師、会員の皆さんのご努力に深い感銘を受けるところです。本当に、和気藹々とした素晴らしい記念会でございました。

さて、私の専門は消化器内科で、特に肝臓を得意にしております。肝臓は糖の代謝を司る臓器であり、糖尿病・ダイアベティスとも密接な関係をもっています。私が肝臓学会の理事長を務めていた時に「肝臓と糖尿病・代謝研究会」というお医者さん達の研究会を作ったのですが、毎年、大変盛況で、今年12回目を迎えます。特に「脂肪肝」については、肝臓医と糖尿病医にとっての共通のテーマということで盛り上がっています。当院でも糖尿病内科と消化器内科が協力して、脂肪肝の患者さんを診療しております。脂肪肝が心配でしたら、まずは消化器内科外来をご受診下さい。

当院は、昭和28（1953）年に公立学校共済組合の職域病院として出発致しましたが、現在では世田谷区内で最多病床数の中核的医療機関となっています。病気と向きあう患者さんのために役立つ地域医療支援病院としての役割を、これからも維持・拡大して参りたいと考えています。当院において、糖尿病友の会である櫛会が50周年を迎えられたことは大変に名誉であります。10周年記念時に櫛会から当院に寄贈された時計も、外来棟2階で正確に時を刻んでおります。関東中央病院が患者さんと共に、これからも長く時を刻んで行けることを祈念して、新年のご挨拶とさせていただきます。